

# 西洋人と黒人に対する日本人の人種ステレオタイプの形成に 関わる心理 - 歴史的背景

—イエズス会宣教師の書簡・報告を中心にした分析—

坂西 友秀\* \*\*

## 目次

### はじめに

### I 大航海時代と日本の発見

- 1 日本と西欧の出会い
- 2 絶海の孤島日本
- 3 黄金の国日本
- 4 シパングの発見
- 5 野蛮人と日本人
- 6 白い膚と黒い膚

### II 西欧人の日本上陸

- 1 宣教師の日本への渡航
- 2 野蛮の国朝鮮と開化途上国日本
- 3 戦乱の国日本
- 4 貧しくとも優良な民
- 5 好奇的の西洋人
- 6 黒人と日本人

### III 考察

- 1 西洋人に対する嘲笑と侮蔑
- 2 西洋 (人) に対する驚きと憧憬
- 3 黒人観と人種観の形成

### 引用文献

\*埼玉大学教育学部教育心理学講座

\*\*本研究は2000年度 (平成12年度) および2001年度 (平成13年度) 科学研究費補助金 (基盤研究C (2)) の交付を受け、研究課題「近代日本人の人種ステレオタイプの形成過程とマイノリティに対する現代的偏見の研究」の一部として行ったものである。

### はじめに

本論文では、15世紀から16世紀に、日本を訪れたイエズス会の宣教師たちが、布教生活を通じて経験した事柄をイエズス会本部に報告書として書き記して送った記録に基づき、西欧人が見た日本人と、彼らの目を通してみた日本人の「西洋人観」・「人種観」を整理し、考察することを目的とした。できるだけ原資料に基づいて記述した。

### I 大航海時代と日本の発見

#### 1 日本と西欧の出会い

日本は四方を海に囲まれ、外国との交流は極めて少ない国だった。西欧諸国との往来は、直接行うことができず、中国や朝鮮を通じて間接的に情報を得ていた。羅針盤が発明され、船に利用されるようになり、航海技術が飛躍的に進歩するのが15世紀である。航海の技術が進歩するのは、一人羅針盤の発明だけによるものではない。さまざまな知識・技術の進歩が相乗的に作用しあう結果である<sup>1)</sup>。航海術の向上は日本と西欧の直接的な出会いを可能にした点で重要である。初めに、フライエスレーベンの整理を参考に、14, 15世紀の航海術に大きな影響を及ぼした要因を概観しよう。

**水路誌** 「自分の家の港に近いところ、生業を営んでいる漁師や、港・河口・入江など限られた範囲で航海している船乗りは、・・・好天とごく浅いところでの測深を除いては、いかなる手段ももっていないに違いない。かれらは沿

岸とその特徴をよく知っており、特定の場所へ行くとき、どのように景色が変わるか熟知して、この景色を利用して危険な浅瀬を避けたり迂回したり錨地を見出したりすることを心得ている。・・・しかし、いったん遠出をしなければならなくなると、他人の地方的経験をいようとする願望が起こってくる。・・・船乗りがその目的のために必要とする沿岸地誌、つまり一種の旅行案内のようなものがすでに古代から知られている」。これらが今日いう水路誌である。西暦1500年以前に港湾誌は書かれているが、多くの国では水路誌の作成はそれ以降だった。

**海図** 第2の促進要因は海図である。地図の作成及び作成法、さらに緯度と経度の概念は、古代のプトレマイオスにまで遡るといえる。さまざまな工夫、改良が積み重ねられ、海図は精緻化されてきた。「正しい尺度の問題のほかに、天文学的な緯度決定の有利さから、地図への緯度線の記入が促進された」。ファン・デ・コーサの1500年の世界図には、赤道と北回帰線が記入してあった。1502年のニック・カネリオの世界図では、子午線とみなされる一本の線に、はじめて緯度の目盛りがつけられた。しかし、この方法では、地球が球形をしていることを無視していたため、航海者には大きな混乱をもたらした。ドイツの地誌学者ゲルハルト・メルカトルが1569年の世界地図で地理学的に正しい根拠にもとづいて緯度を漸長させた地図を発表した。その後ワゲナーによる沿岸描写図つきの海図の集大成が公刊され、広範囲に影響を及ぼした。中世は海図が科学的知識・技術を基盤に整えられ始めた時代でもあった。

**潮汐** 古くから潮汐は航海にとって重要なものであった。「ヨーロッパ海域では、潮汐の発生と月との関係は非常に顕著である。起潮力はもちろん月だけで決まるのではなく、大潮や小潮においては太陽の作用もはっきり現れるが、その洗練された計算法、ましてやもっと立ち入った詳細については、中世の航海者たちはほと

んど関心を持たなかった。船は小さかったし、精密な水位測定もなく、何よりも正確な時計がなかった」からだ。

**水深** 海図は何よりも水深の記載によって他の地図と区別される。日本でも幕末になり多くの外国船が各地の港に入港するが、水深は大型船にとって必要不可欠の情報であった。ヘロドトスが紀元前500年に用いた測深方法は、19世紀まで用いられた方法と基本的には同じであった。「測鉛を投下して底に届くまで伸ばし、測鉛索を再び巻きあげて海底の試料を引き上げるのである。その長さで水深がわかり、試料は測深地が投錨に適した底質であるかどうかの貴重な結論を与える」。岩礁や浅瀬の有無を知るとは航海には絶対に欠かせないことであった。15、16世紀まではおもに沿岸に沿って航海することが多かった。こうした事情が、情報の必要性を高めていた。外洋が安全なことは広く知られていたが、深海の水深に関心が向けられるようになったのは19世紀に入ってからだ。

**羅針儀** 羅針儀に関する記述は、1187年に遡る。スコットランドの修道僧アレグザンダー・ネッカム(1157—1217)が次のように記述しているという。視界が悪いときには水を張った容器に磁石を入れたアシの一片を横たえる、するとこのアシ片は水面を泳ぐが最後には北の方を指す、と。これは浮子羅針儀(液体式羅針儀)の原型である。しかし、14世紀に羅針儀が航海に利用されるようになって、水夫たちのほとんどは、磁針を引きつける磁力は北極星にあると信じていた。フランスとフランドルでは1400年以前に、スペインでは1404年に、ハンブルクでは1435年に、イタリアでは1300年代に羅針儀が船舶で利用されていた。15世紀には天体を利用した船の位置の決定方法が採用されるようになった。コロンブスも北極星を利用した緯度の決定と太陽による緯度の決定を行ったと報告しているが、測定を正しく理解していたか否かは不明だ。

船の建造技術、地球、天体、海洋、航海に関

する科学的知識と技術の長足の進歩とあいまって、14、15世紀の西欧諸国は、未知の大陸、未開拓地、西洋人にとって人跡未踏の地を求めて全世界に進出したのである。「大航海時代」の到来であり、日本と西洋が直接交流する時代の幕開けであった。

## 2 絶海の孤島日本

日本の位置について、マルコ・ポーロの「東方見聞録」<sup>①</sup>には次のように記述されている。「チバング諸島が散在している海面をくチン海」と称する・・・距離があまりにも遠いので、これらの島々に赴くことはとても大変な難事なのである。ザイトウンやキンサイの商船でこれらの島々に航行する者は莫大な利益を収めるが、その代わりまる一年間というものは航海の困難を重ねねばならない。それというのも、くチン海にはただ二種類の風しか吹かないため、—一つは冬の風で、彼方に赴く際の順風であり、他は夏に吹くその逆の風で、彼方からの帰還に当たって利用できる風である—冬季をもって出発し夏季を待って帰来せねばならぬからである。チバング諸島はインドからもすこぶる遠い距離にあることを心得ておいていただきたい。なおこの海面は・・・実は大洋にほかならない・・・くチン海>やチバング諸島は何しろ我々の帰路からはずれることすこぶる遠い地域であり、それに私自身もまだ親しくそこに赴いたことがないのだから」。

ヨーロッパから見れば、日本は東アジアの最東端に位置する孤島であり、とるにたらない島国であった。ルイス・フロイスは、「ばあでれ(司祭)メステレ・フランシスコ・ザビエル」が、今まで発見された世界の最も遠い端に、万物の製作者のことをおよそ知らず、製作者と全く縁の遠いこの国民を・・・」と記している(1565年4月27日付書簡)<sup>②</sup>。また、フランシスコ・ザビエルは、日本についての伝聞を重要な情報として書き留めている。「このマラッカの町にいた時、私がたいへん信頼しているボル

トガル商人たちが、重大な情報をもたらしました。それは、つい最近発見された日本と呼ぶたいへん大きな島についてのことです」(1548年1月20日の書簡)、「最近、中国を越えて200レグア〔1120キロ〕、あるいはそれ以上離れている日本について情報を得ました」(1549年2月2日の書簡)<sup>③</sup>。諸国間の交易が盛んになり、宣教師が世界中に進出した16世紀といえども、日本に関する情報は著しく少なかったことがわかる。

## 3 黄金の国日本

わずかな情報、それも西欧の人々が直接日本を訪れて得た情報は少なく、彼らの手にしたものは諸国を伝わる伝聞による日本情報が中心であった。マルコ・ポーロによる「東方見聞録」が代表的な情報源の一つであった。マルコ・ポーロは1270年にヴェニスを出発して、西アジア・中央アジアを縦断し、東南アジア、スマトラ、セイロン、インド、中近東、を経てヴェニスに1295年に帰還した(図1)。マルコ・ポーロは、商人であり、各地の産物・物価・市況・通貨などに高い関心を寄せてその模様を綴っている。「・・・実益につながることに切実であるがゆえに、それらの事情に関しては不正確や曖昧さは許されうべくもない」(愛宕)<sup>④</sup>。そのため、見聞録は内容豊富でかつ正確であるという。とはいえ、マルコ自身は直接日本を訪れたわけではなく、日本に関する情報は大陸を巡察する間に収集したものであろう。

東方見聞録に載る日本は「チバング島」としてごく短く記述されている。「チバング〔日本国〕は、東のかた、大陸から千五百マイルの大洋中にある、とても大きな島である。住民は皮膚の色が白く礼節の正しい優雅な偶像教徒であって、独立国をなし、自己の国王をいただいている。この国ではいたる所に黄金が見つかるものだから、国人は誰でも莫大な黄金を有している。この国へは大陸から誰も行った者がいない。商人でさえ訪れないから、豊富なこの黄金はか

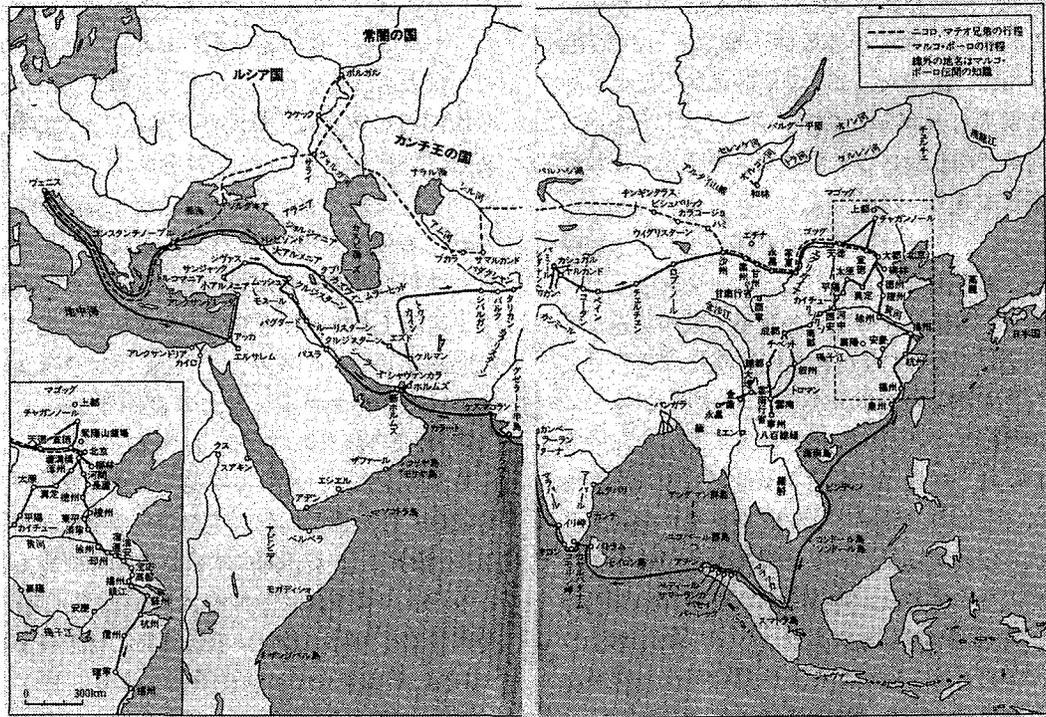


図1 マルコ・ポーロの行程 (東方見聞録1, 2000より引用)

つて一度も国外に持ち出されなかった。右のような莫大な黄金がその国に現存するのは、全くかかってこの理由による。・・・この国王の一大宮殿は、それこそ純金づくめで出来ているのですぞ。我々ヨーロッパ人が家屋や教会堂の屋根を鉛板でふくように、この宮殿の屋根はすべて純金でふかれています。したがって、その値打ちはとても評価できるようなものではない。宮殿内に数ある各部屋の床も、全部指二本幅の厚さをもつ純金で敷きつめられている。このほか広間といわず窓といわず、いっさいがすべて黄金造りである。げにこの宮殿はかくも計り知れない豪華ぶりであるから、たとえ誰かがその正しい評価を報告しようとも、とても信用さえないに違いない」。黄金の屋形に黄金の食器、いたるところ金にあふれる国、これが日本である。

黄金ばかりではない。「この国には多量の真珠が産する。ばら色をした円い大型の、とても

美しい真珠である。ばら色の真珠の価格は、白色真珠に勝るとも劣らない。この国では土葬と火葬が並び行われているが、土葬に際しては、これら真珠の一顆を死者の口に含ませ習いになっている。真珠のほかにも多種多様の宝石がこの国に産する。ほんとうに富める国であって、その富の真相はとても筆舌には尽くせない。無尽蔵の金銀財宝を狙った二度にわたる元寇とその失敗が紹介されている。

#### 4 シパンクの発見

東方見聞録に記された日本の姿を信じた冒険家、探検家も少なくなかったようだ。コロンブスもその一人だった<sup>6)</sup>。「この島には、彼らが鼻にぶらさげている黄金も産出しますが、私はここで暇取っていないで、ともかくシパンクの島に到着できるかどうか行って見たいと考えております」(1542年10月13日)。「私はこの地で、船(ナオ)にあるすべての容器に水を満た

しておきたいと思っていたのです。そして、天候さえ許せばすぐにも出発して、島を廻り、この地の王と会って話をし、彼が持っているという黄金を手に入れることができるかどうか見てみたいと考えております。それから、私の連れているインディオ達がコルバと呼んでいるもっと大きな島へ向かおうと思いますが、この島は、彼らの手真似から察するに、シパンクに違いないと考えます」(1542年10月21日)。「今日はクーバー島に向けて出発したいと考えております。この地の者たちが手真似で示しているその大きさや富からいって、この島はシパンクに違いないと私は考えているのであります」(1542年10月23日)。「この地の者たちの話によると、クーバ島は非常に大きくて、そこでは取引もさかに行われており、黄金や香料もあれば、大きな船もあり、また商人も居るということでした。彼らは、西南西へ向かえばこの島に達すると教えてくれたのであります。私は言葉が判りませんが、この島々のインディオ達や、船に連れてきているもの達の手真似から、そのとおりでございますし、この島こそは、シパンク島に違いないと考えますので、それに従っております。この島については、幾多のすばらしいことが伝えられており、私の見た地球儀や世界地図絵にも、この辺りにこの島が記されているのであります」(1542年10月24日)。

「(提督は)ここからクーバに向け出発したが、インディオ達が手真似で、この島の大きさや、金や真珠のことを語ったことから、この島こそがすなわち、シパンクであると考えていたのである」(1542年10月26日)。「船へきた多数のインディオ達が手真似でこの島には黄金があるとのべ、黄金を採取する場所の名前まで上げたが、中で最もきばきとしており、熱心というか、一番うれしそうに話しかけてきた男が一人、金鉱の場所を教えたいから一緒に来てくれるように頼んできて、提督を喜ばせた。この男は、友人か親類かを一人連れてきていたが、この二人は、黄金の産地の名をあげてシパンクの話

した。彼らはその地をシバオと呼んでいたが、そこでは非常に多量の金が産し、その酋長は金を打って作ったのぼり(バンデラス)をもっている。ただこの地は東のずっと遠方にあると語った」(1542年12月24日)。「そして特に多量を産するのがシパンクで、この地を彼らはシバオと呼んでいるが、その量があまりに多いので、土地のものはこれをなんとも思っていない、自分は彼地からこれをもってきてもよい、もっとも、彼らがボーイオと呼んでいるこのエスピノーラ島のカリバタ州には、それよりももっと多量の黄金があるとのべた」(1542年12月26日)。アメリカ大陸にたどり着いたかのコロンブスも、インドを経て東進しながら、島影を見ると「黄金の国」シパンクを発見したと喜んだこと一再ならずあった。

#### 5 野蛮人と日本人

航海技術の発展は、世界的な規模で国々への渡航を可能にした。それは、植民地時代の到来を告げるものでもあった。科学技術の進歩が著しかった西欧諸国、ポルトガル、スペイン、その他の多くの国は、商業的な利益をあげるために、インドや東南アジア諸国の香辛料、安価な海産品、工業原料・製品の確保のために先を争った。当時の西欧の「先進国」は、次々と新たな国々、島々を発見し、西洋とは全く異なる世界、文化に接した。それは、迷信に頼り、粗暴な行動を日常とするなど、西洋の合理的世界観からはかけ離れた「野蛮」そのものの世界であった。宣教師や航海士の記録には、「野蛮」人に関する記述がいたるところに見られる。1542年にインドに到着したスペインのフランシスコ・ザビエルの書簡にも同様の記述が散見される。インドは一部ポルトガルに支配されていたが、周辺の諸王国との抗争は絶えなかった。宗教上の対立もあり、原住民の生活は貧困の極限にあった。ザビエルの報告にもこうした様子を読み取ることができる。「北部の国パダカから逃れ、持ち物を奪われて悲しみ嘆く信者を訪れ

るため、私は陸路をたどってコモリン岬への道を歩きました。彼らを見て、私はこの世の最大の苦痛を感じました。ある者は食べるものがなく、他の者は年老いて歩むことができず、ある者は死に、旅路で分娩する夫婦、その他哀れな情景でした」<sup>60</sup> (1544年8月1日 書簡第32)。

1545年には、ローマのイグナチオ・デ・ロヨラに宛てて貧困窮乏の地で活動できる強壮な若い宣教師を派遣することを要請している。「洗礼を授けないうちに、たくさん(の幼児が)死んでゆきますし、私たちはすべての村に駆け付けることができませんので(たくさんの方が)必要なのです)。・・・身体的な労苦に耐えられる人でなければならぬと申しますのは、この地方は非常に暑くて、多くの地域では良質の水がないため、きわめて苦勞が多いからです。身体を養う食物は少なく、米と魚と鶏のみで他の物はありません。パンはなく、ぶどう酒もなく、そちらにたくさんある物もこちらにはありません。病人でもなく、年とった者でもなく、若くて健康な人でなければ、洗礼を授け、教え、村から村をめぐって生まれたばかりの幼児に洗礼を授け、未信者たちから迫害や侮辱を受けている信者を守りながら、絶え間ない苦勞を耐え忍んでゆくことはできません」<sup>61</sup> (1545年1月27日 書簡第47)。植民地インドが西欧の文明国と大きな落差を持つことを強調している。

モルッカ諸島から336キロ離れたモロタイ島民について、ザビエルは危険な住民と述べている。「モロタイ島は非常に危険な土地柄で、人々は陰険も甚だしく、食物や飲物のなかに毒をいれます」<sup>62</sup>。「私と親しくしているたくさんの方や私のことを心配してくださる方は、そんな危険なところへ行かないように忠告してくださいました。私が(モロタイ島へ)行くことをやめさせることができなかつた分、解毒剤をいっぱい私にくださいました。・・・これほどの愛情と涙とをもって私に与えられた解毒剤を受け取らず、彼らの祈りのなかでいつも私を思い出して祈ってくださいることだけお願いしま

した。祈りこそ毒に対抗できるもっとも確かな薬ですから」<sup>63</sup> (1546年5月10日 書簡第55)。ヒन्दュー教やバラモン教とキリスト教の対立など、宗教上の抗争がこの背景にあったかもしれない。

また、モルッカ諸島の未開な風習の数かずとして、次のように記している<sup>64</sup>。「この島々の住民たちはきわめて野蛮で、背信行為は日常のことです。・・・この地方の島々では、他の部族と戦い、喧嘩して人を殺した場合殺された人の肉を食べます。病気で人が死ぬと、その人の手や踵を食べるため、大きな宴会を開きます。この島の誰かが[大きな催しをしたいと思うと]、他の人に年老いた父を提供してくれと頼み、その代わり自分の父親が年をとれば、あなたが宴会したい時に、自分の父親を提供すると約束するほど野蛮なのです。私は一ヶ月もたないうちに他の島へ行きたいと思っていますが、その島でも戦いで殺された人の肉を食べ、宴会のために年老いた父親を提供してくれと他の人に頼みます。その島の人々が信者になりたいと言っていますので、私は[モロタイ]島へ行きます。彼らのあいだでは淫乱の忌まわしく罪深い風習があり、それはあなたがたが信じられないくらいで、私も書く勇気がありません」(1546年5月10日 書簡第55)。

コロンブスもまた、エスパニョーラ島に野蛮人が居ると記している<sup>65</sup>。「彼の顔つきは、今まで見た連中とはかなり違い、ずっとみにくかったと提督はのべている。彼らは体じゅうにいろんな色を塗りつける習慣を持っていたから、その顔にも墨を塗っていた。頭髪は皆長く伸ばし、後でひくくって束ね、それをおうむの羽根を並べた上にのせていた。この男も他の連中も皆裸であった。提督は、この男は人を喰うカリベ族に違いないと考えた(実際には間違いだった)」(1492年1月13日)。男も女も真裸で生活する住民を西欧とは全く異なる文化水準にある人々と見ていた。

日本はといえば、マルコ・ポーロは、食肉人

種として紹介している<sup>66</sup>。「この一事だけは是非とも知っておいてもらいたいからお話するが、チパング諸島の偶像教徒は、自分たちの仲間でない人間を捕虜にした場合、もしその捕虜が身代金を支払えなければ、彼等はその友人・親戚すべてに『どうかおいで下さい。わが家で一緒に会食しましょう』と招待状を發し、かの捕虜を殺して— 無論それを料理してであるが— 皆でその肉を会食する。彼等は人肉がどの肉にもましてうまいと考えているのである」。人食い文化をもつ点で日本は野蛮国と見られていた。

## 6 白い膚と黒い膚

膚の色の違いは、人間の優劣、文化的優勢と関わりがあるかのように、記録や報告書や書簡に頻繁に言及されている。洋の東西を問わず、多くの人々が膚の色に対して敏感に反応し、偏見や差別を抱き続けてきたのである。宣教師であるフランシスコ・ザビエルは、ローマのイエズス会員に宛てて書いた書簡<sup>67</sup>で膚の色についてふれている(1544年1月15日 書簡第20)。インドのコーチンで布教活動をしていた彼は、バラモン僧との討論の中で、「彼(バラモン僧)はさらに、人間のなかにはさまざまな膚の色があるが、神は白いのか黒いのかと尋ねました。この地の人はすべて色が黒く、その色が良いと思っているので、神は黒いといっています。それゆえ、たいていの偶像は黒いのです。彼らはそれにたびたび油を塗るので非常に臭く、見ればびっくりするほど醜悪です」。ザビエルは膚の色の優劣を明言していないが、膚の黒さを積極的に肯定しているとは受け取れない。「びっくりするほど醜悪です」という表現は、体(偶像)に塗る油が臭気を放つことと、油を塗った状態は醜悪であることが合わさった結果であると解釈することもできるが、体が黒いゆえに醜さがいっそう引き立つと理解することもできるのである。さらに、ザビエルは、モルッカ諸島の住民については、「彼らの皮膚は黒い

と言うよりも[むしろ]黄色がかった褐色をしていて、極端なまで恩知らずです」<sup>68</sup>と述べている。

一方、コロンブスもまた各地の住民の膚の色に関心を示し記録している。第一回の航海で上陸したルカヨ諸島の住民についてこのように記している<sup>69</sup>。「中には黒く墨を塗っている者もありますが、彼らはカナリア諸島の者たちと同じ肌色をしており、黒くもなければ、白くもありません。しかし、白く塗ったり、赤く塗ったり、その他手当たり次第の色を塗りつけているのです。顔だけを塗っている者もあれば、体全体を塗っている者もありますし、また目だけとか、鼻だけ塗っている者もあります」(1492年10月10日)。しかし、ザビエルがバラモン僧を見たときは異なり、好印象を持っている。「彼らは皆そろって背丈が高く、顔つきもよく、よい姿をしているのであります」。パラゴアの住民についても同様である。「『この地のものは、持っている物を何でも皆、ほんの僅かの値段で分けてくれ、籠一杯の綿でも、紐のはし切れ(その他何とでも)と替えてくれた。また彼らは悪意もなければ、戦も好まず、男も女も皆、母親が産み落とした時と同じような裸で歩いている』、と提督は述べている。実際女達は恥部をかくすだけの綿製のものを身につけているだけである。彼女達は皆非常に礼儀正しく、色はカナリア人よりもずっと黒いというほどではない」(1492年11月6日)。別の島の女性たちについては、「彼らの容貌について、男も、女も、この地のものは、他の地方の者たちとは比べものにならないほどで、色もずっと白く、中にはエスパニャ人だといえるくらいに色の白い若い女が二人居たと語った」(1492年12月13日)。エスパニョーラ島では、住民の肌の白さを誉めている。「この王を初めとして、他のものも皆、母親が生んだ時と同じように真裸で歩いており、女たちもこれで何ら恥らうことがなかった。この地の者は女も男も、これまで見てきた中で最も美しく、色も非常に白い。こ

の地は絶好の気候ではあるが、かなり寒いこともあるのだから、衣服をまとして太陽と大気からその肌を守っていたならば、彼らもおそらくエスパニヤの人と同じほどに色白くなっていたことだろう」(1492年12月16日)。「私(提督)がエスパニョーラ島と名づけましたこの島に数多くすむ人々は、すべてその振舞いまことに愛らしく、話し振りもやさしく、他の地の者のように、話をすればまるでおどかしているようなとは異なるのであります。彼らは男も女も、背丈ほどよく、色も黒くありません。最も彼らは皆、黒や、他の色、その多くは赤色ですが、それを身体に塗っております。これは日光にあまり焼けないようにするためだということを知りました」(1492年12月24日)。

マルコ・ポーロは、「(日本国の) 住民は皮膚の色が白く礼節の優雅な偶像教徒であって、独立国をなし、自己の国王をいただいている」と記して、膚が白いと紹介している。しかし、日本に渡った宣教師の報告に日本人の肌の色に関

する記述はほとんど見あたらない。

## II 西欧人の日本上陸

### 1 宣教師の日本への渡航

大海に浮かぶ小国といえども、日本には中国を通じて、インドや東南アジア、そして遠く西欧諸国に関する情報が入ってきていた。さらに航海技術の向上によって、インド、東南アジアを経て、日本近海まで北上する西欧の船が現れるようになる<sup>6)</sup>。こうした商船に乗って日本にやってきた初期の西欧人が、当時ヨーロッパで大きな力を持っていたイエズス会の宣教師たちであった(図2)。宣教師は未開の国の人々にカトリックのキリスト教を布教することにより、野蛮な状態から救いだし、神の摂理が支配する世界へと開化させることを使命としていた。こうした宣教師の活動は、仏教が支配的であった日本では、西欧流の合理的思考様式がはじめて紹介される機会であった。それとともに、姿・形のまったく異なる「西欧人」、いかえ

れば「異人種」との初めての直接的な接触であった。当時日本の社会を統率し、支配していたのは武士であった。知識があり教養のあった武士や宮廷・公家の人々にとっても、異国人は珍しく、好奇の対象であった。科学的な知識・技術を元にした器具・用具を豊富に持ち、それらを使いこなす未知で不気味な存在でもあった。少し長くなるが、珍事とも言える出来事をあげておこう。

宣教師のフランシスコ・カブラルが1571年にみやこ(京)を訪問した折り、岐阜にいた信長に謁見した<sup>7)</sup>。「ここに一つの滑稽なことが起こった。度たびみやこへ行って、教会と交渉があり、親しくしていた、信長の政庁の人びとを除いて、その国の住民たちは今までにこのような人たちを見たこともなく、知りもしなかったので、ばあでれたちは彼らにとって目新しく、たいそう珍しい人たちであった。ところで、ばあでれフランシスコ〔カブラル〕は近視で、岐阜の町にはいった時、この町の場所柄や優雅さを見るために、彼は眼鏡をかけた。一般庶民は衣服を見ただけでもたいそう奇異に感じたが、眼鏡を見て人々の驚異は比較にならぬほど大きかった。そうして、ばあでれが道を通りがかかった時、彼等は目で見る物についてじっくり考えることができなかったため、数人の単純な人たちは、ばあでれには目が四つあって、二つはすべての人びとが生まれながらにもっている普通の位置にあり、ほかの二つはそれから少し離れたところに外に向かってあり、鏡のように光っているのは見るも恐ろしいと、かたく思いこんだ。この噂は一般民衆に確実なことで、まちがいないこととして弘まり、いよいよばあでれたちが出発しなければならなかった日には、男女、子供たち、大勢が、街の人々だけでなく、遠くはなれた多くのところから、また、尾張の国からも殺到して来たほどの有様で、この世にも不思議なことを見られるようにと、彼らが立ち行くのを待ちもうけていた人びとは、四千人乃至五千人を数えた。また、彼らの好奇心の情

熱は激しかったので、あの新規なものをもっと近くから望みのままに見ることができるよう、彼等は突然大挙してあの人〔ばあでれを指す〕たちが泊まっていた家へ侵入しようとしたので、家主は自分に災難が起らないように、ばあでれたちが住んでいた〔二〕階へ通ずる階段を余儀なく取外さなければならぬと思つた。それでも彼等は上ろうとして、家の柱を攀じ登ろうとした。

彼らが約三、四時間待ち、張りつめた期待が極度に高まった後、一同が戸口に目を注いでいると、家から出てきて馬に乗った最初の者は、日本人いるまん(修士)ロレンソであった。彼はもう片方は盲目であったから、唯一の目しかもっていなかった。彼等は四つの目がある男を見ることを期待していたし、そのことばかり考えていたので、いるまんロレンソをこのような面相で見るとはまことに滑稽に思われ、自分たちが期待していたのとはまったく異なったものがきたので、声をあげて、大声で爆笑せざるを得なかった。

しかし、彼等は、四つの目の男は後からくるのだと心から思いこんでいたので、彼が来るのを待っていた。旅の伴をしていたばあでれが馬に乗った時、彼等は皆ももっているような普通目二つだけしか彼に見なかった。しかし、彼等にとっては異様な人間を見る喜びと新規さとに心を奪われて、三千人近くの人々が彼の馬を取囲んだ。彼らは大声で叫び、彼の前で欣喜雀躍し、手を打ち鳴らしたので、道路の幅が広いにもかかわらず、馬はそう易々とは前進できず、道を開かなければならなかった。人びとは自分たちが聞いていたことが或いはやはり真実であるかどうかを試してみようとして、いつもばあでれをじっとみつめながら、市外近くまでかけて行った。西欧人が、人々の注目的であったことを示す好例である。

宣教師たちは、黒人を連れ歩いてきた。日本人にとって黒人はさらにめずらしく、不思議な

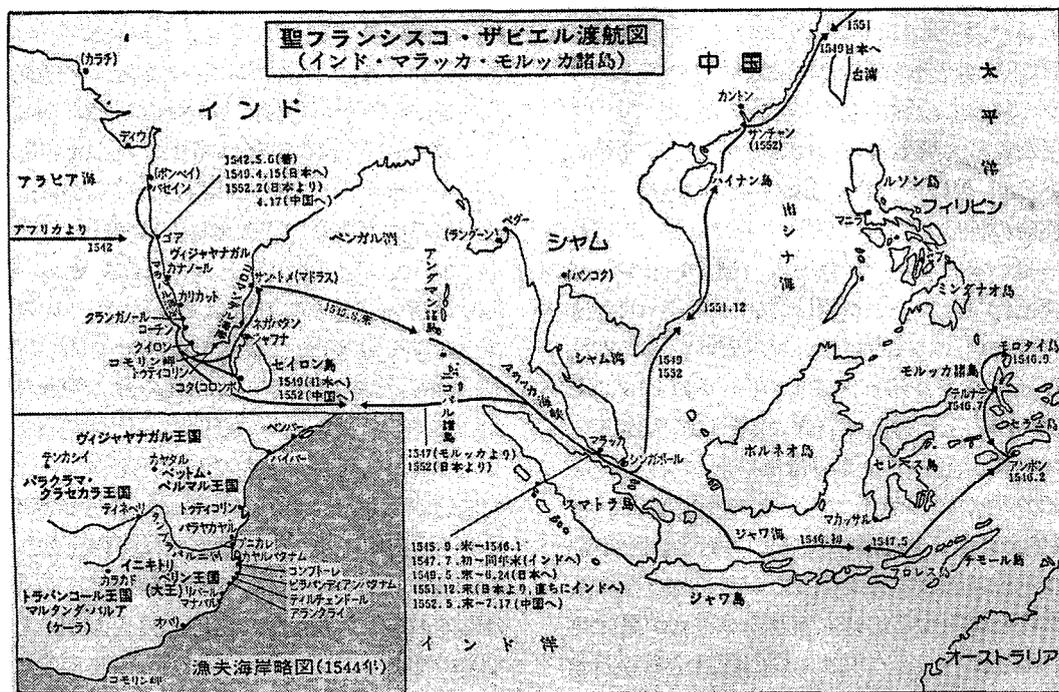


図2 聖フランシスコ・ザビエル渡航図(聖フランシスコ・ザビエル全書簡1, 1994より引用)

存在として受けとめられていた。西欧人にとって黒人は奴隷であり、人間としては扱われていなかった。日本でもまた黒人は人間ではなく、動物とみなされていた。黒人の容姿、服装は、南蛮絵に写実的に描写されていて、当時の様子を知ることができる<sup>(9)(10)</sup>。西欧人は洋服を着、靴をはいているが、黒人は裸足で歩き、白人に南蛮傘を差しかけるなど、召使いとして働いている。宣教師の連れた黒人を見た信長は大いに驚嘆し、強く好奇心を駆り立てられた。想像だにできなかった黒人の姿は、当時の人々の「人間観」を一変させる大きな出来事であり、潜在的に「人種」意識を喚起する重大な契機だったのではないだろうか。

ところで、中国や朝鮮の人々との交流、琉球を通じた東南アジアの人々との日本人の交流は、古くから盛んに行われていた。彼等は、肌の色も、髪や目の色も、容姿、背丈も似たアジア諸国の人々を自分たちとまったく異なった人々、「人種」として受けとめることは少なかった。それに対して、あらゆる点で著しく異なる西欧の人々との出会いは、すべての日本人に大きな衝撃であったに違いない。

## 2 野蛮の国朝鮮と開化途上国日本

1578年7月5日、イタリア人宣教師のアントニオ・プレネステーノは、日本を目指してマカオを出発した。途中、猛烈な台風襲われ、難破しそうになりながら、すんでのところで陸地を見つけた<sup>(11)</sup>。「正午に我らは陸地を発見したが、濃霧のため、それが（どこの陸地か）知ることができなかった。また、この時、我らは前橋下帆が引き裂かれたのはデウスのいかに大きな御恵みであったかを悟った。もし、（あの時）前橋下帆がさらに四時間ももちこたえていたならば、私たちは間違いなく海岸に衝突していたであろう。この日、ポンプによる排水を終え、我らは死の淵から脱したことを認め、歓喜のうちに進んだ」。船の改良と航海技術が進歩したとはいえ、海洋を渡るには命の危険にさらされ

るとが多かった。しかも、「同日の午後、陸の方から風が吹いてきた。水先案内人はおもに帆をできるだけしっかりと結び付けると、彼が望んだ通り、風を利用してそこから遠ざかり始めた。・・・同じ天候が続く間、定航船（ナウ）は向きを変えることができぬため、或る時は船尾を前に、或る時は舷側を前にというように、回転しながら進んだ」。航海は、風任せであった。難破や疾病により失命する可能性も高く、強靱な体と体力を持つものといえども、遠くヨーロッパからアジアの東端にいたるには決死の覚悟がいった。日本にヨーロッパの人が上陸するなどということは稀有なことだった。

彼らの到着地は、期待していた日本ではなかった。このときの彼らの報告は、アジアの国を西欧諸国がどのように見ていたのか、その一端を示すものであろう。「月曜日、陸に近づいた時、我らはそこが（想像していたような）日本の地ではなく、かつて我ら（ポルトガル人）が漂着したことのある朝鮮の地であることを知った。ここは野蛮で不人情な人々が住んでおり、いかなる国民とも通商することを望んでいない。人の言によれば、数年前、ポルトガル人のジャンク1艘が同地に赴いたが、この邪悪な人々は彼らのサンバンを奪い、その乗船者らを殺したので、（ポルトガル人は）ジャンクを焼かれぬように少なからず用心したとのことである。このため、我らは新たな懸念と恐怖に圧迫され始めた。・・・船にはポルトガル人と召し使いの合わせて三百名の戦闘員がいるのであるから、同地に大砲で防備を固め、時々、外に出て水と食料を手に入れるならば、陸地にいる方が何らかの救済策を得る可能性が高いことは疑うべくもないし、その地で木を切って船を造り、これを日本に遣って救助を求めようというものであった。また、彼らは最後に、海上で飢えや渇きと戦うよりも、上陸してかの野蛮人のみならず、まさに悪魔と戦う方がはるかにましである。この頃には、日本は野蛮な国とみなされていたわけではない。とはいえ、ヨーロ

ッパなみに開化した国であるとも見られていない。「平戸には司祭館があって我が会員の司祭二名が駐在している。・・・彼らの内の一人であるバスチアン師がその地の果物など元気づける品物を携えて我らに会いに来た。・・・我らは彼を大いに歓迎し、喜びの涙を流した」。1549年のザビエル上陸以来、日本にはすでに宣教師が住み、布教の地であったことが、彼らの抱く肯定的日本観の大きな背景要因であった。

朝鮮や日本に限らず、当時は西欧文化圏以外の国は野蛮な地、未開の地と見られていた。前述したように、好印象を持ってルカ諸島の住民を受けとめたコロンブスであったが（実際は提督）、文化的には未開ととらえている。「私には、彼らはあらゆる面からみていかにも貧しい者たちのように思えました。彼らは皆、母親が彼らを産み落としたときと同じような状態の裸で歩いており、女達も同様でした」（1492年10月10日）。決して対等な人間として見ていたわけではないことは、次のように言っていることで明白である。「私は（提督）は、身体に傷跡のあるものを幾人か見ましたので、それはどうしたのかと手真似できいてみましたところ、彼らは、近くの島の者がやってきて捕らえようとしたため、身を守ったのだという様子を示しました。これは、大陸からこの島へ彼らを捕らえにやってくるのだと私は思いましたし、また現にそう考えております。彼らは利巧なよい使用人となるに違いありません」。原住民は、西欧の人々の使用人に「適する」というのである。

## 3 戦乱の国日本

日本の生活になじむよう努力しながら布教活動を進める西欧の宣教師たちは、日本文化の特徴を西欧文化と本質的に異なるものと認識し、日本人は西洋人と大きく異なる特質を持っていると大司教に報告している<sup>(12)</sup>。

イエズス会は、日本に司教を派遣する旨連絡してきた。しかし、宣教師ヴァリニャーノは日

本の特長事情を考慮して派遣をとどまるよう要請している（1580年8月25日書簡）。「第一の理由は、我らは日本に多数のキリシタンを擁しているが、彼らは異教徒の領主が治める各国に分布しており、その領主たちは司教が彼らの臣民を管轄することを決して認めないことである。第二の理由は、日本人の生活様式はヨーロッパの生活様式や法、習慣と全く異なる故に、キリシタンでさえヨーロッパにおけるのと同じように教導することができないことであり、この相違は多少言葉を用いたくらいではとても言い表せぬほど大きなものである。しかし、日本人は、どれほど身分が低くともいかなる侮辱や罰にも決して甘んじることがなく、従って司教は彼らをほとんど司牧することができず、彼らに対して罰を加えることも、またいかなる権限を行使することもできないと言え十分であろう。第三の理由は、日本は世界でも最も反乱の多いところであり、決して一つの状態に留まることがなく、また、人々が互いに大なる反乱と謀反を行うため、日本のどこにも安全な場所がないことである。当地の司教は、たびたび冒瀆と虐待を受けることになろう。第四の理由は、（布教を）維持するにはきわめて多額の収入と経費を要することである。何となれば、日本の生活様式がまさにそうであり、この様式に従って教会を維持せねばならず、キリシタンの大身には庇護を得るため、また、異教徒の大身には改宗に反対させぬため、無数の進物を贈らねばならないからである。日本の人民はその領主にたいそう依存しているので、領主の庇護なしには何もすることができない。彼ら（聖職者）は数多くの消費と苦勞、世俗のかつ靈的な誘惑に見舞われるのであり、どれほどの聖職者がこれを耐え忍ぼうと欲し、また、そうした誘惑にいかに対処するのか私には判らない。言葉を学ぶには多年を要するが、この苦勞とて純粹なる慈愛と従順の命によらなければ耐えられない」<sup>(13)</sup>。日本は群雄割拠し、人々は完全に領主に支配されており、異教であるキリスト教を布教するこ

とは許されないこと、日本と西欧の文化はまったく異なり、西洋流儀は通用しないこと、日本人はたとえ身分が低くとも、どのような侮辱や罰に対しても甘んじないこと、賄賂が常態化しており、布教活動を維持し、人々を信仰させるには多額のお金がかかること、戦乱の世にあり治安が悪いこと、世俗的な誘惑が多すぎること、などが布教活動を困難にする日本独特の要因としてあげられている。

#### 4 貧しくも優良な民

民衆の生活は貧しく、自由な間引きと墮胎が行われていた。「女が子供を産むと、その子供を養育しないですむように、嬰兒を殺してしまうか、あるいは胎児をおろすために薬を用いる」<sup>9)</sup>。「年若くて貧しいキリシタンの女性が異教徒である母親の勧めによって墮胎したことである。墮胎は日本においては子供を育てることができない貧民の間に広まっているが、これを知った当地のキリシタン宗団は彼らの大半が日曜日と祝日ごとに集まるキリシタンの家に彼女が来ていっしょに祈ることを決して許そうとはせず、まずはじめに告白してかの罪を償うことを求め、その後赦すであろうと言い、彼女が流した涙も、また赦しを求めて示した悔悛も、結局、彼女が告白して和解するまで彼らには受け入れられなかった」<sup>10)</sup>。

ルイス・フロイスは堺からの報告で次のように述べている。「婦人たちが墮胎を行うという事は、日本ではきわめて頻繁なことである。ある者は貧乏が原因で、ある者は大勢の娘にうんざりして、或る者は自分が仕える身であって、そうでもしなければよく勤めを続けることができないために、また、その他いろいろな理由から、[それを行っている]。しかも、誰一人それに対して憤りを感じないと言うのが通例である。或る人たちは、誕生後、その頸に脚をのせ、窒息させて、子供を殺し、また或る人たちは墮胎を誘致する因となるある薬草を飲む。そうして、堺の町は大きくて人口が多いので、朝、岸

辺や堀端を歩いていくと、そこに投げ捨てられた子供たちを見ることが度たびある。母親が誕生後投げ捨てようと思っている子供に対して、幾分でも人情味を示そうと思う場合は、子供たちを海岸に置き、潮満ちて彼らを完全に殺すか、或いは壕の中へ投げ捨てる。すると、普通は犬が来て彼等を喰ってしまう」<sup>11)</sup>。裕福なキリシタンが、捨て子を助け、養育に出すこともあった。母親が墮胎で命を落とすことも稀ではなかった。「あるキリシタン婦人が、妊娠中に、子供をおろすためにある薬を用いた。その墮胎のために、彼女は病気になる、その後まもなく死んだ」<sup>12)</sup>。キリシタンになる人々に貧困な人々が多かったことにも関係する事柄かもしれない。

しかし、宣教師たちは、日本人は穏やかであり、日本を布教に適した地であると見ていた。「私たちが交際することによって知りえた限りでは、この国の人びとは今までに発見された国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒の間では見つけれられないでしょう。彼らは親しみやすく、一般に善良で、悪意がありません。驚くほど名誉心の強い人びとで、他の何よりも名誉を重んじます。大部分の人びとは貧しいのですが、武士も、そうでない人びとも、貧しいことを不名誉と認めていません」<sup>13)</sup> (1549年11月5日 書簡第90)。フランシスコ・ザビエルは日本人を絶賛している。特に、洗礼を受ける対象の青年に対してはその資質の高いことを読み取っている。宣教師ダリオは次のように述べている。「聴聞を希望する彼(柴田勝家)の友人たちは心の変わり易い青年でもなければ、珍しいものを喜ぶ輩でもなく、身分高く物事に動じぬ年齢の人たちであり、聴聞すれば悟ることが期待される」<sup>14)</sup> (1581年5月19日付 ルイス・フロイス書簡)。武士階級の子弟は、礼儀正しく、教養も高く、優れた者がいると見ていた。薩摩での宣教活動で、「新しく発見された世界で、新しいキリスト教徒の中に、これほどすぐれた、明晰な理解力をもっている国民はないと思われる」<sup>15)</sup>と書いている。

すでに述べた中にもあるが、日本人は非常に好奇心が強いと受けとめられている。人種の違いに対する関心に限らず、日常生活のいたるところで、好奇心の強さが表れていた。宣教師たちは、こうした日本人の新しい物好き、ものめずらしさに強く惹かれる傾向を、布教活動でもたくみに利用していた。同時に、日本人の清潔好き、端整好みにも注意を払っていることがわかる。安土山の市にある修道院を信長がある日突然訪れた<sup>16)</sup> (1582年2月15日付 ガスパル・コエリュ日本年報)。信長の好奇心とともに日本人の好奇心の強さを読み取って面白い。「信長は、ある日突然、我らの修道院を訪れ、その到来を知らされぬまま司祭たちは彼を修道院に迎えた。これは彼が不整頓と不潔を非常に嫌うからであり、オルガンティーノ師はその性格を知っているので欠点を見られぬように常に注意を怠らなかつた。・・・信長は一同を修道院の階下に留めて最上階に昇り、深い情愛と親しみを込めて司祭および修道士たちに語りかけ、時計を見に行き、修道院に備え付けのクラブとピアノを見て両方とも弾かせ、これに耳を傾けて喜んだ。・・・鐘ならびにその他の司祭たちが同所に持っている珍しいものを見に行つたが、その品々は異教徒を引き寄せる上できわめて重要なものである。というのも彼らは非常に好奇心が強くそれらを見に来るからであり、我々が日々体験する通り、彼らを我らに親しませ説教を聴かせるための手立てとなっている。今日までに日本へ渡来した事物の内、日本人が最も好んだこと(の一つ)はオルガン、クラブ、ピアノを演奏することであった。そのため我らは今では二台のオルガンを、一台は当安土山に、また今一台を豊後に所有しており、各地にはクラブを備えている。少年たちが(これらを)学び、ミサやその他の祝祭ではヨーロッパの祝祭における歌手その他の設備の不足を彼らによって補っている。以上のことは、異教徒の心を動かしデウスの教えの栄光と荘厳さを知らしめるためにきわめて必要なことである」。

#### 5 好奇的の西洋人

今まで見たこともない西欧の人々に触れた驚きは、日本に限らずどこでも共通していた。自然状態で生活していたパラゴアの島民の驚嘆を、コロンブスは以下のように記述している。「(部落の) その家は非常に大きな天幕のような形をしていた。・・・住民はその習慣に従い、二人(調査に行った乗組員)を非常に丁寧に迎え、男も女もみんなが二人を見に来てきた。そして一番立派な家に二人を宿泊させ、身体を触ってみたり、手や足に接吻したりしてすっかり驚嘆し、この二人が天から降ってきたものと思ひ込んだ。二人もまたそのように思わせておいた、ということであった。・・・しばらくすると男たちは出て行き、女たちが入ってきたが、彼女達もまた同じように二人の周囲に坐り、その手や脚に接吻して、二人が彼女らと同じように肉と骨で出来ているのかどうかをたしかめた」。15世紀頃、日本国内で庶民が海外から来た人に出会うことはまったくなかったといつてよい。特に、京都、大阪など大都市や都近辺以外の地方では、人々が外国人と遭遇することは皆無であった。外見も言葉も、身につけているもの、持ち物すべてが異国風の人々は、身分や階層の違いを越えて、強烈な印象を人々に与えた。

1581年5月19日付で、宣教師スイス・フロイスが日本に滞在していた同僚の司祭に宛てた書簡には、あふれる好奇心から、外国人である宣教師一行を一目見ようと押しかけ群がる民衆の姿が書かれ、当時の民衆の外国人観を知るうえで興味深い<sup>17)</sup>。「都から越前までの五十里に及ぶこの(我らの)旅のため、(信長に)若干の口添えをしてくれるよう(懇願し)、我らは聖霊降臨(祝日)の午後、長浜に到着した。ここは大きな市(まち)で(羽柴)藤吉郎の城があり、彼が養子にしたお次(秀勝)と称する信長の一子がいた。同所にはかつて司祭が訪れたことがなかったので、私が市の入り口に着くとすぐ、住民が皆騒ぎ、私には彼らが後について

くるように思われた。同行した人の話では、およそ三、四千名が、或る者は我らの前を行って大声を上げ、また或る者は我らの衣服を嘲笑し、不敬な言葉や悪口を吐き、人々の騒ぎに驚いて家から出てきた者もあったということであった。嘲笑（を耐え忍ぶ）苦行がより長く続くようにデウスは案内人が我らの宿泊すべき家を誤ることを望み給うた。こうして我らは人々に囲まれたまま家を探してずいぶん市を歩いた。（目差す）家に着くと、その主人は群集から身を守るため戸口を閉めさせたが、（群集は）我らが同伴していた黒人は私が（下僕として）連れているのだとおもったらしく、三度、四度と戸を破り、何としてもこれを見ようと（家に）入ってきた」。

ごった返す群集の様が目に浮かぶ。いかに外国人が珍しい存在であったかを物語る記述である。ここで注目したいのは、西欧人である宣教師たちに対して侮蔑的な態度をもち、揶揄し嘲笑する行動をとる者が少なからずいたことである。この描写からは、当時の日本人の多くが、西洋人に対して尊敬や憧れの念を抱いていたとは推測できないのである。一度ならず、二度三度と戸を破ってまでも異国の人を一目見ようと押し寄せた人々の行動は、西洋人、特に黒人は珍しく、最高の好奇の対象だったことを示すものであろう。もちろん、洗礼を受けた住民は宣教師を慕い、尊敬の念を抱いていたことは言うまでもない。民衆の熱気はすぐには覚めやらず、夜中まで見物客は人だかりをつくったという<sup>(10)</sup>。「気晴らしのために（我ら）を見に来た者が多く集合し、夜の十時になっても立ち去らず、（家の中に）入ろうとして門を叩いて止まない。また或る者は己の欲望を容易に果たそうとして屋根に上がり、我らが見えるように覆いを外した。家の主人は同市の重立った身分の高い人で、われらも大いにもてなした。我らは世俗一般の礼をしたほかに、彼並びにその家族全員、数人の客に説教を行った。彼らはこれを聴いて喜び、我らのことについてこれまでとは異なる考えを

抱いた」。屋根を剥いでまで宣教師たちを見ようとする民衆は、珍しいもの見たさにまさに興奮と熱狂の渦に飲み込まれたのである。

さらに、聖霊降臨の（祝日の）次の火曜日、フロイスらは宿泊した小さな町を出発し、府中という越前の中心的な市に向かった。そこでもまた、一行は民衆の好奇の目に曝されることになった<sup>(11)</sup>。「その時まで我ら一同は市を見ながら心静かに道を進んでいたが、市民らが当地にデウス（我らをこう呼んでいる）が現れたと思い、長浜で私を取り囲んだ群衆よりもさらに大勢が集まった。そして私をよく見ようとして、市の住民と身分ある人たちは夫人の家臣から駕籠を奪い取り、宙を飛ぶようにこれを運んだ。市中から集まった人々は皆、たいそう大声を上げながら私の後を追ってきた。午後四時か五時のことであろうか夫人の家に着くと彼女は立派な晩餐をもって歓待し、我ら一行に大いなる好意を示した」。まさに、外国人宣教師が現れたことは、天変地異にも匹敵する一大事件だったのである。

「もし、毎時間、当地で起こることを記すとなれば、たとえ他の事をしなくても尽きることがないであろう。日本人は珍しいものを好み、我らと我らのことはこの国の人々にとってはことごとく珍しいからである。本日の午後、あらゆる類の平民がここに集まってきた。多くはただ私を見るため（集まった人々）であったが、ほかにも聴聞のため（に来た）者や世間の噂に動かされた者（がいた）。彼らの中に法華宗の一寺院の重立った仏僧一人と他の仏僧二人（がいた）。また或る者は屋根もしくは木に登り、或る者は家を取り巻き、家はすでに（人で）満杯であるにもかかわらず、何としても家に入って説教を聴かんとして壁を壊し戸を激しく叩き始めた。さらに街路は相当広いが、聴聞を望む男女や子供でいっぱいであった。ダリヨ並びに右近殿のキリシタンの家臣たちがかくも多数の人々と争うのではないかと大いに危ぶまれた」<sup>(12)</sup>。民衆が殺気立つほどに西欧人の出現は、

驚天動地の出来事だった。

## 6 黒人と日本人

西欧人以上に好奇心を掻きたてられたのが、宣教師たちに同伴していた黒人であった。ルイス・フロイスは、1581年4月14日付の日本に滞在していた司祭に宛てた書簡で、黒人を目の当たりにしたときの民衆の様子を細かく記述している<sup>(13)</sup>。彼らは、巡察師ヴァリニャーノについて豊後を出発した。和泉国の堺の海岸付近に到着し、上陸した。彼らの上陸とともに、多くの信者が出迎えた。「同夜、結城（ジョアン）殿（又は結城弥平次）は九里の所から、又池田丹後殿は四里の所から、その他多数の貴人が各地から駆けつけてきた。土曜日と枝の日曜日に（巡察）師は伊（地）智文太夫が（我らに）与えた家において了珪の面前でミサを行い、日曜日には枝を祝福したが、（参列した）人があまりにも多かつたため、その三分の一も屋内に収容することができなかった。同（日）の枝の祝日に我らは岡山に向けて出立した。堺の市を出る時、無数の人々が巡察師の並はずれた背丈と我らに同行していた黒人（カルフ）の（膚の）色を見ようと街路で待ち受けていた。堺は極めて自由（の市）であったが、多数の民衆と武士が集まったので、我らの一行が狭い道を通る際に数軒の店を壊したにもかかわらず苦情を言うものはいなかった。堺を出ると三十五頭を超える駄馬、三、四十名の荷持人足、ほぼ同数の乗馬が居り、黒人もまた騎馬するようにしきりに勧められた。道行くごとに人々が我らを出迎え、多数の貴人が同行して必要な乗馬を整えた。また、我らに相見えんとする多数の貴人が馬上から出迎えた」。ことさら黒人は誰にとっても好奇の対象であった。

「復活祭の日に続く週の月曜日、信長はこの都にいたが、多数の人々が黒人を見ようとして我らの（修道院）門前に詰め掛けたため、これが騒ぎの発端となって投石による負傷者や瀕死者が出た。門を警固する者が大勢いたにもかか

わらず、人々が門を破ろうとするのを容易に抑えることができなかった。皆が言うには、もし金儲けをするために（黒人を）見せ物にしたならば、少なくとも一人の者が短期間に八千乃至一万クルザード（の金）をいともたやすく稼ぐであろうとのことである。信長（もまた）黒人を見ることを切望し、彼を呼び寄せ、オルガンティーノ師が彼の許に連れて行った。信長は大変な騒ぎようで（黒人の）腰から上の衣服を脱がせたが、それ（膚の色）が自然であって人工のものでないことを信じなかった。信長の息子たちもまた黒人を呼び寄せ、皆大いに喜んだ。今は大阪の指揮官（カピタン）である信長の甥も黒人を見て非常に喜び、これに錢（カイシャ）一万を与えた。彼らの見物を得たために、我らには非常に多忙なことであった」<sup>(14)</sup>。黒人は、白人以上に珍しく、信長の驚きようからすると、彼が黒人に会う初めての体験だったと思われる。

このように、1581年（天正九年）安土城を訪問した宣教師達は、黒人奴隷一人を同伴した<sup>(15)</sup>。そのときの信長の驚きと喜び様は尋常ではなかった。「パードレは黒奴を一人同伴してゐたが、都においてはかつて見たことなき故、緒人皆驚き、これを観んとして来た人は無数であった。信長自身もこれを観て驚き、生来の黒人で、墨を塗ったものでないことを容易に信ぜず、僕々これを観、少しく日本語を解したので、彼と話して飽くことなく、また彼が力強く、少しの芸ができたので、信長は大いに喜んでこれを庇護し、人を付けて市内を巡らせた」。信長は、黒人を一人もらい受け、使用人（家来）にしたほど強烈な興味関心を示した。

1582年、信長が京都の本能寺で休みの床に就こうとしていたとき、明智光秀の謀反にあい、不意打ちによる無残な自死を遂げた。本能寺の変後、信長が家来にした黒人は、信長側で大いに戦ったと記されている<sup>(16)</sup>。「信長の求めによって巡察師が彼の許に残っていた黒人（カフル）が信長の死後、世子の邸へ行き同所で長い

間戦っていたので我らは少なからず心配していたが、明智の一家臣が彼に近づき、恐れずに刀を（棄てるよう）求めたところ、彼はこれを差し出した。別の家臣が明智の許に行き、黒人をいかにすべきか問うたところ、その黒人は動物（ベステリアル）であって何も知らず、また日本人でもないから彼を殺さず、インドの司祭たちの教会に置くように命じた。明智光秀が、本心から黒人を動物と見ていたか定かではない。しかし、白人や黄色人と同等の人間とみなしていなかったことは確かである。

## II 考察

15、16世紀の日本人と西欧人の出会いを、おもにイエズス会の宣教師の日本報告をもとに整理した。海外との交流がほとんどなかった日本人にとって、宣教師たちは好奇の対象であり、異様な人々でもあった。しかし、西欧人に対する印象や観念が、日本人の人々全体に一般化するには接触の場が少なすぎた。宣教師の書き留めた書簡や報告は、言及する地域がおもに大都市や都に限定されるが、日本人が初めて接する西洋の人々や黒人をどのように受けとめたのかを知る好材料である。IとIIの整理をもとに、日本人の外国人観、人種観を中心に考察してみよう。

### 1 西洋人に対する嘲笑と侮蔑

信長に庇護されたとはいえ、イエズス会の宣教師達は、日本の民衆から嘲笑され、侮蔑されることが多かった。そこには、彼らが異教と呼んでいた仏教緒宗派との対立が厳しかったという問題が一つある。特に法華宗との対立は激しいものであった。彼らが身に着けていた黒衣が異国風で、話す言葉が異なり異様であったことも揶揄される一因であったであろう。「夜になると、人々は盛んに石を投げればあでれの後をつけ、ほかの者たちは一掴みの土や馬糞をばあ

でれに向かって投げつけたが、その時彼は、少しでもばあでれに近くなるように、葦を編んだ壁の間に手を突っ込んだ。また、ほかの者どもはばあでれのことを『天狗』とか、『にせもの』の誑し狐』と呼んだ。ある者どもが行くと、ほかの者どもが来るという具合で、腕白小僧どもは罵倒と悪戯との楽しみで、一日中のほとんど大部分を過ごし、それを阻むものも止める者もいなかった<sup>(1)</sup>。殺害される恐れ、家に火をつけられる危険も日常的に感じていた。「家でキリシタンたちに教話をしていた最中に、ダイヤモンドという一流の僧侶の弟子で、短刀を秘し持った一僧侶が戸口から入ってきて大胆不敵にも、その家の中で、・・・短刀の鞘を払って、そこにいた同宿の伝道師といるまんを殺害しようとした<sup>(2)</sup>。「(僧侶たちは)キリシタンたちの家に石を投げ、昼間は、彼らに行き逢えば平手打ちを喰わしたり、その顔に唾を吐きかけた<sup>(3)</sup>。宣教師たちが「夜、身体は凍えきって腹はへり、全身びしょ濡れになって宿に着いてみると泊めてももらえないようなところもあった。ある時は、ひどい寒さと深い雪とのために、脚が腫れ上がったこともあった。またある時は、道が非常に険しく、いくつも高い山越えで、しかも彼等は荷物を背負っていたので、途中で倒れたこともあった。その上、彼等は身なりも貧しく粗末で、日本人の眼には、全く新しい、異様な、この地方ではまだ見たこともない人々であったので、行った所どころ、往来や広場で子供たちから石を投げられたり、悪口をあびせかけられたりしたこともあった<sup>(4)</sup>。子供から大人まで伴天連に対して相当の悪辣な仕打ちをしていた。

宣教師たちが京の都に逝く「道中では、少年たちや行き逢う下層民が、後ろから大きな声で叫んだり、突然大笑いを始めたり、悪口をあびせたり、また、子供たちは往来に走り出て、ばあでれを嘲り笑って同じことをやった<sup>(5)</sup>。「僧侶たちは、我らの仲間に対して多くの偽証をあげようとして極力奔走した。そうして、世間の

人々に自分たちの言うことを信じさせるために、切支丹伴天連は人間を喰い、人間の身体の中に閉じ込められた悪魔である、伴天連や伊留満の言うことはすべて、彼らの口をかりてものを言う悪魔の入れ知恵である、と言いふらして、血に染まった布衣を教会の戸口に投げつけ、入り口に貼り紙した。その紙には、「何人も悪魔であるこの人たちの言うことを信ずるな」と書いてあった。また、僧侶たちは我等の仲間これと似た多くの罵詈雑言を加えた。彼らが往来を歩いていた時、僧侶は彼らを蔑んで畜生呼ばわりをした。すると少年たちは石を投げ、彼らをこの地上の最も忌まわしい者と見做し、ひどい言葉で彼らを罵って、まるで黒人にむかって話すような口のきき方をしたことも幾度かあった。そういうことをしたのは下層の賤しい人々で、上流の人たちは彼らに敬意を表して尊敬した<sup>(6)</sup>。おもに貧しい庶民が悪口雑言を彼らに浴びせかけていた。

豊後では、「僧侶や賤しい民衆たちから我々は嘲笑され、貧乏な人びとや身分の低い人たちばかりがキリシタンになるのを見るので、彼等は我々を軽蔑をもってあしらいます。ばあでれたちがこの国に来て以来、今日にいたるまで相変わらず、異教徒たちには我々が人肉を食べるという説が言いふらされていて、それゆえ、彼等はいつでも我々に対して不快な感じや毛嫌いをもっています。そのために、我々は街でも道でも悩まされなければなりません。何しろ、ごく小さな子供たちでさえも我々を馬鹿にして、後ろから侮辱するような言葉を叫びます。時どき彼等は夜我々に石を投げ、また、別の時には、気がついてみると、彼らが我々の家を焼き払おうとした火箭が屋根の上にあります<sup>(7)</sup>。こうした記述を見ると、民衆は、西洋人宣教師を単なる好奇や憧れの目で見たのではなく、異端の人々として排除しようとしたことがわかる。海外の文化を勝れたものとして憧憬の念をもって取り入れる姿は一般の民衆には認められない。

### 2 西洋(人)に対する驚きと憧憬

その一方で、信長は宣教師を庇護し、安土城にも呼ぶほどだった。西欧の珍しい品々を重宝した。宣教師たちもまた、日本にない貴重品を献上するのを常としていた。また秀吉にしても、名古屋城に宣教師を招き、城内をくまなく案内するなど、好意的な態度を示していた。1590年、インド副王の命で使者として宣教師ヴァルニャーノ一行が京都の秀吉に謁見した。「ポルトガル人は、はなはだ優美な服を着け、行列を整えて〔鳥羽を〕出で立ちました。ミヤコへ着くまで、この珍稀な行列を見物するのに四方から集まって来た人の賑いは素晴らしいことでした。ミヤコへ到着すると、一行の通る街路という街路にはことごとく数かぎりない人が埋まって、きらびやかに飾り立て、はなやかな服を身にまとい、整然とした行列でミヤコへ入って行くこのような異様の見知らぬ人びとを見て誰も皆びっくりしました。一行の一人一人を天より降下した仏、すなわちパゴダのようだともいいました。彼らにとってきわめて珍しいものであっただけ、ポルトガル人について知るところが少なかつたわけでございます。それまではポルトガル人は、毎年長崎の港へ来る慣わしであって、日本人の眼には高貴にして優美な人と映るよりは、商売を巧みに行うという方に理解されていまして、また、日本人とは風俗が反対でしたから、定航船(ナウ)との取引のために長崎へ来る(日本人)商人たちの家郷へ帰ってからの報告を聞いたミヤコの人びとは、ポルトガル人は価値もなく尊敬もできない者と信ぜられていたのでございます」。同じ報告書に、数ヶ月前に聚楽第に向かった朝鮮の使節一行を見て、「その人品が悪く、脛を露わし、物を食べながら進んだ」(1592年イエズス会報告書)<sup>(8)</sup>とある。1592年10月1日付の1591、1592年度のフロイスの日本年報でも正装し行列を組んで都を出発したポルトガル人たちを見ようと群集が四方から押し寄せたとある。「数ヶ月前に朝鮮国王の使節も都に赴いたが、朝鮮やシナの習

慣に従ったもので、多数の随行員を伴ってはいなかったが、(下品であり)重要な人々は誰もいなかった。そこでヨーロッパの儀杖とても彼らと同じであろうかと考えられていたのである。それが、今回の、我等使節(一行)の華麗さに驚嘆し、このような光景は都で初めてのことだ」った。行列の先頭には、金の飾りをつけた甲冑二領、金銀で飾りつけた二振りの衝剣、珍稀な鉄砲二挺、豪華絢爛の短剣、像の油絵掛布四枚、美しい野戦用天幕一張りが整えられた。これを見た秀吉は、「殊のほか歓喜し、非常な好奇心をもって眺め、大いに嘆賞し、遠国からかくも新奇な(贈)物が眼前に置かれている有様に接して、絶大な喜びのほどを示した」という。

武家、商人、町人と、しだいに南蛮趣味が波及し、南蛮風俗の模倣は歌舞伎、食品、服飾品などに幅広く見られるようになった<sup>9)</sup>。イエズス会信者には当然のこと、武士を中心にポルトガルをはじめとする西洋諸国の文化に対して尊敬と憧憬の念が生まれつつあったといえよう。

### 3 黒人観と人種観の形成

大航海時代に入り、西欧列強が世界各地に進出した。それによって、世界中にいろいろな言語を用い、西洋とは著しく異なる容姿、慣習、文化をもつ民族のいることが明らかにされ、広く知られるようになった。なかでも、膚の色の違い、人種の違いは、強い関心を生んだ。宣教師たちも黒人を同行させていたことはすでに述べた。黒人奴隷もまた、キリスト教の布教対象になっていた。日本に現存する南蛮絵には西欧人とともに、多くの黒人が描かれている。服は着ているが、彼らは履物をはかず、従者として荷物を担いで運んだり、犬や鹿や馬を引いたりする姿で描写されている。白人西欧人とは明らかに異なる姿で描かれている。宣教師の資料からは、黒人奴隷の実態や西欧の黒人観、人種観をつぶさに知ることは出来ない。信長や一般民衆の黒人を見たときの驚きは、一般化した黒人観や奴隷観がまだ形成されていなかったこと

を示すものであろう。同時に、西欧の人種や奴隷に対する観念もまだ日本に普及してはいなかったことを意味するものである。したがって、15、16世紀の一般の日本人は、黒人や奴隷の存在とその実態を知らず、定型化された独特の黒人観を持っていなかった、とってよいだろう。しかし、奴隷そのものの存在をまったく知らなかったわけではない。「婦人たちは皆鍵がかかった一室にいること、人望のある男二人がその鍵をもち、婦人たちの世話をすることを彼らが処理し終わってから、彼等(ポルトガル人)自身は数日後に出帆しようとしていた・・・彼等は非常に廉価で日本人たちから買い取った婦人たちを大勢船に乗せていた。日本人たちは日本人たちで、彼女等をシナで奪い取ってきては、後で売っていた」<sup>10)</sup>。このように、日本に寄港するポルトガル船では、黒人以外の奴隷の売買が行われていたのだからだ。

15世紀、コロンブスのインディアスの発見以来、黒人に限らず、原住民もまた、西欧諸国から迫害され虐殺された。「土人」の子供は奴隷として売買され続けた<sup>11)</sup>。インディアンは開拓者の敵、野蛮人とみなされ殺害の対象とされたのである。地理的文化的に西欧から隔絶されていた日本は、つぶさにこうした状況を知ることではできなかった。しかも、かろうじてスペイン、ポルトガルの商人や宣教師から得ていた西欧の情報も、秀吉の1587年の宣教師追放令により断ち切られた。その後江戸時代の鎖国へと続き、インディアンの迫害や黒人奴隷の惨状など、当時日本では知る由もなかった。こうしてみると、日本人、とりわけ都や大都市の商人や武士の間には、白人に対する観念がポルトガル人やスペイン人との接触を通してわずかに形成されていたが、黒人に関する固定した観念は生まれていなかったというのが可能な解釈であろう。

総合すると、西欧の人々に対しては、商業的な利益を求め実利的な商人との印象が強く、一般の日本人の間に西欧(人)への強い憧れ意

識が生まれていたとはいえない。宣教師に対する民衆の侮蔑的な態度を見ると、西欧諸国が先進国で、日本が後進国という認識はなかったと推定できる。群雄割拠する戦国時代、武将は国内を支配し、統一することに集中せざるを得なかった。同時に国境を接する国を持たず、外国との争いがなくとも海外事情に疎くさせる大きな要因だった。信長や秀吉は、日本を中心に世界を認識しており、白人と黄色人種の優劣など関心外であった。「彼らは自らの習慣にはなはだ執着しているので、自身と比べて他の人はことごとく野蛮であると考えている」<sup>12)</sup>。宣教師ヴァリニャーノは、日本の諸侯が自分中心の世界観を強固にもっていることを報告している。日本人、なかでも戦国武将は自分こそが世界の頂点にあり、世界を動かしていると考えていた。この観点からしても、戦国の武将は、日本と肩を並べる海外の国など意識しておらず、彼らの中に明確な人種意識は形成されていなかった、ということができよう。黒人は、そもそも人種として位置づけられていなかったのではないか。信長や明智光秀の言動から明らかである。これが15、16世紀の日本人の一般的な人種意識であった。

### 引用文献

- 1) Freiesleben, H.C. 1978 *Geschichte der navigation*. Franz Steiner Verlag GmbH. (坂本賢三訳 1983 航海術の歴史 岩波書店)
- 2) マルコポーロ 2000 東方見聞録 1, 2 (愛宕松男訳) 平凡社
- 3) Luis Frois S.J. 1926 *Die Geshichte Japans (1549 ~ 1578) von P.Luis Frois S.J. nach der Handschrift der Ajudabibliothek in Lissabon übersetzt und kommentiert von G.Schurhammer und E.A.Voretzsch, Leipzig*, 1926. (柳谷武夫訳 1963 日本史 1 一切支丹伝来のころ— 平凡社)
- 4) G.Schurhammer S.J. et J. Wicki S.J., 1944-1945

*Epistolae S. Francisci Xaverii aliaque eius scripta, Tomus I, II, Monumenta Historica Soc.Jesu. Romae.* (河野純徳訳 1994 聖フランシスコ・ザビエル全書簡 2 平凡社)

- 5) Cristbal Colon 1493 *LIBRO DE PRIMERA NAVIGACIÓN (EL diario a bordo, extractado por Fray Bartolomé de Las Gasas)* (林屋永吉訳 1977 コロンブス航海誌 岩波書店)
- 6) G.Schurhammer S.J. et J. Wicki S.J., 1944-1945 *Epistolae S. Francisci Xaverii aliaque eius scripta, Tomus I, II, Monumenta Historica Soc.Jesu. Romae.* (河野純徳訳 1994 聖フランシスコ・ザビエル全書簡 1 平凡社)
- 7) Luis Frois S.J. 1926 *Die Geshichte Japans (1549 ~ 1578) von P.Luis Frois S.J. nach der Handschrift der Ajudabibliothek in Lissabon übersetzt und kommentiert von G.Schurhammer und E.A.Voretzsch, Leipzig.* (柳谷武夫訳 1963 日本史 5 一切支丹伝来のころ— 平凡社)
- 8) 岡本良知 1965 日本の美術 19 南蛮美術 平凡社
- 9) 神戸市立博物館 1998 南蛮美術セレクション、—神戸市立博物館— (財)神戸市体育協会
- 10) 松田毅一監訳 1992 十六・十七世紀 イエズス会日本報告集 第Ⅱ期 第5巻
- 11) Luis Frois S.J. 1926 *Die Geshichte Japans (1549 ~ 1578) von P.Luis Frois S.J. nach der Handschrift der Ajudabibliothek in Lissabon übersetzt und kommentiert von G.Schurhammer und E.A.Voretzsch, Leipzig.* (柳谷武夫訳 1963 日本史 2 一切支丹伝来のころ— 平凡社)
- 12) 松田毅一監訳 1992 十六・十七世紀 イエズス会日本報告集 第Ⅲ期 第6巻
- 13) Luis Frois S.J. 1926 *Die Geshichte Japans (1549 ~ 1578) von P.Luis Frois S.J. nach der Handschrift der Ajudabibliothek in Lissabon übersetzt und kommentiert von G.Schurhammer und E.A.Voretzsch, Leipzig.* (柳谷武夫訳 1963 日本史 4 一切支丹伝来のころ— 平凡社)

- 14) 村上直次訳 (柳谷武夫編輯) 1969 イエズス会  
日本報告 上・下 (新異国叢書 3 雄松堂書店)
- 15) Luis Frois S.J. 1926 *Die Geshichte Japans (1549  
~ 1578) von P.Luis Frois S.J. nach der  
Handschrift der Ajudabibliothek in Lissabon  
übersetzt und kommentiert von G.Schurhammer  
und E.A.Voretzsch, Leipzig.* (柳谷武夫訳 1963  
日本史 3 一切支丹伝来のころ一 平凡社)

- 16) Chales Darwin 1906 *Journal of Researches into  
the Geology and Natural History of Various  
Countries visited during the Voyage of H.M.S  
Beagle round the World* (高地威雄訳 1959  
ビーグル号航海記 I・II・III 岩浪書店)  
(2001年 9月 28日提出)  
(2001年 10月 11日受理)

## The psycho-historical background of Japanese concerning ethnic stereotypes towards Westerners and Blacks — An analysis based on letters and reports on Japan by the Jesus Societies. —

Tomohide BANZAI

This study investigated the historical and psychological processes of Japanese concerning ethnic stereotypes towards Westerners and Blacks in the 15th and 16th centuries. Japan was isolated from the rest of the world, especially Western countries, in the late Middle Ages. The Jesus societies sent missionaries to Japan to enlighten Japanese people by spreading the Catholic doctrine. They gave the Japanese their first experience in encountering Western people, who have white skin, brown hair, and blue eyes, and Black slaves with black skin. The conqueror of Japan, Shogun Oda Nobunaga, was very surprised at the black skin of the black slave who accompanied missionaries in his castle, and did not believe that the Negro had black skin naturally. He was confident that someone had painted the skin with black ink. In the Azuchi-Momoyama (1573-1600) era, only foreign traders saw foreign men and women. Even the children, like the adults, looked down on foreign missionaries. They often attacked the missionaries by throwing stones because the missionaries wore long black clothes and seemed to be strange and poor. The primary reason for the attacks, however, was their opposition to the Japanese Buddhism that was widely spread among the Japanese people. At the same time, however, all the Japanese people respected and looked upon the European missionaries, in particular the Portuguese, who made a gorgeous parade to meet the Japanese ruler, Shogun Toyotomi Hideyoshi, in Kyoto in 1590. People had never seen such a glorious and sovereign line of people as that of the Western people (Portuguese). We concluded that Japanese people didn't have any ethnic stereotypes toward the Europeans and the Blacks, but had ambivalent views of both of them as the Japanese were caught between envy of the Portuguese missionaries and other Western people and contempt for them in the 15th and 16th centuries. *J.Saitama Univ., Fac. Educ. (Sci. Educ. I)*, 51 (1); 65 - 84 (2002)

## 埼玉大学紀要 (教育学部)・発行要項および投稿規定

本学部に所属する教員等が学術研究の成果を発表するための学術機関誌として、本学部は以下の要綱にしたがって「埼玉大学紀要(教育学部)」(以下、「紀要」と呼ぶ)を発行する。

1. 発行の責任 紀要の発行および紀要掲載論文の著作権の管理は総務委員会の管轄とする。総務委員会は紀要の発行および著作権の管理に責任を負う専門委員会として、総務委員若干名から構成される「学術紀要委員会」を設置する。
2. 紀要の発行 紀要の発行は、毎年3月末と9月末の年2回とする。
3. 紀要の分冊発行 紀要は、教育科学編[ISSN0387-9321]、人文・社会科学編[ISSN0387-9305]、数学・自然科学編[ISSN0387-9313]の3冊とする。どの分冊に掲載するかは、投稿者の希望による。
4. 退官記念号の発行 退官する教員の所属する講座が希望する場合には、講座ごとに1冊の退官記念号を発行することができる。
5. 別刷の作成 別刷は各論文等につき50部を作成する。投稿者がそれ以上の部数を希望する場合は、50部を越えた部数について投稿者の実費負担とする。

本学部の教員等がその学術研究等の成果を紀要に掲載しようとするときには、以下の投稿規定に基づいて原稿を学術紀要委員会に投稿する。

6. 投稿の資格・原則 紀要に掲載される原稿は、学術研究等の成果を内容としかつ未発表のものに限られる。本学部の教員と他の者との共同研究等の成果は、本学部の教員が実質的に研究を分担していれば掲載することができる。
7. 原稿の提出 3月末発行の紀要に掲載を希望する者は前年の9月末までに、また9月末発行の紀要に掲載を希望する者はその年の3月末までに原稿を提出しなければならない。投稿者は申し込み用紙を添えて正副2通の原稿を提出する。原稿は完成原稿として提出しなければならない(したがって校正に際し原則として原稿の加筆修正や追加等をしてはならない)。
8. 原稿の長さ等 一編の原稿(図表を含む)は刷り上がり16頁(四百字詰原稿用紙で60枚弱)以内とする。これを超過することが予想される原稿は、超過分を投稿者が実費負担することを条件に受理することができる。一人の教員が複数の原稿を投稿する場合には、それらの総量が上記の範囲を超えないものとする。複数の教員が連名で一編の原稿を投稿する場合も上記の範囲内を原則とするが、とくに要求がある場合には学術紀要委員会と協議の上で刷り上がり24頁以内とすることができる。  
美術教育講座に所属する教員が自分の美術作品に関する論文を投稿する場合、教員一人につき当該作品一点(1頁)をカラー印刷で掲載することができる。二点以上の作品のカラー印刷掲載を希望する場合には、超過分は投稿者の実費負担とする。
9. 原稿の使用言語 原稿の使用言語としては、日本語、英語、ドイツ語、フランス語等いずれの言語をも用いることができる。
10. 原稿用紙 日本語原稿は所定の原稿用紙を使用するか、もしくはワープロ原稿で提出する。外国語による原稿はワープロ原稿で提出する。
11. 表題と要旨 日本語原稿の場合、申し込み用紙に必ず外国語の表題・氏名を記入しなければならない(裏表紙の外国語による目次用)。また日本語原稿の場合、原則として外国語による要旨を原稿の末尾に付けるものとする。キー・ワードを付けることが望ましい。
12. 執筆規定 原稿の執筆に関する詳細については、別に執筆規定を定める。
13. 原稿の受理 投稿された原稿は4月上旬または10月上旬に学術紀要委員会が本規定等に照らして受理し、原稿の本文末尾に提出年月日および受理年月日を記入する。

[1987年 2月 6日 第一次改訂]  
[1998年 11月 6日 第六次改訂]

### 埼玉大学紀要教育学部 第51巻第1号 (2002) 学術紀要委員会

首藤敏元 (幼児教育講座)・重川純子 (家政教育講座)

土肥俊郎 (技術教育講座)・高須賀昌志 (美術教育講座)・武田ちあき (英語教育講座)

平成14年 3月20日 印刷  
平成14年 3月31日 発行

編集兼 埼玉大学教育学部  
発行 さいたま市下大久保255番地  
電話 048-858-3142

印刷 明誠企画株式会社  
武蔵村山市榎2-25-5  
電話 042-567-6233 (代)